財団発！ NEWS & TOPICS

第5回 明日のビジネスを担う女性たちの交流会 in 大阪 開催レポート

パネルディスカッション

パネリスト

小川 理子氏　パナソニック（株） 役員
多田 真規子氏　西日本旅客鉄道（株） 執行役員
中島 伸子氏　井村屋グループ（株） 専務取締役 兼 イムラ（株） 代表取締役社長

コーディネーター

永峰 好美氏　（株）読売新聞社東京本社 編集局企画委員

5回目となった「明日のビジネスを担う女性たちの交流会 in 大阪」。今年度は2016年11月2日（水）に開催し、約230名の方にご参加いただきました。3名の女性役員によるパネルディスカッションでは、株式会社読売新聞東京本社編集局企画委員の永峰好美氏をコーディネーターに迎え、仕事を通じた体験談や後輩女性へのメッセージを語っていただきました。

小川 理子氏
パナソニック株式会社
役員

「自分の強みを持っていれば、自分の軸に戻って柔軟に考えられるようになる」

私は3歳から始めたクラッシックピアノをずっと趣味で弾き続けていたこともあって、音の仕事に関わりたくて今の会社に入社しました。音響研究所で研究開発に携わっていたのですが、7年目のときに組織が解散。このまま会社を続けていいのだろうかと落ち込んでいたところ、ジャズドラマーでもあった上司に励まされてバンドに誘われ、ジャズピアニストとしての世界が広がりました。ジャズピアニストとしての活動を続けながら、ネットワークサービスやCSR・社会貢献など、これまでとは全く異なるキャリアも経験してきました。これまで経験していなかった分野の仕事も、チャレンジしてみると知らなかった自分の一面が発見できて、やればできるものだなということを実感しています。現在は、また一巡して音響の仕事に携わることになり、高級オーディオブランド「テクニクス」を立ち上げたところです。

ネットワークサービスに異動した頃は、急速にインターネットが普及しはじめ、当社でも新たなビジネスが立ち上がったところでした。企画から開発・運用のチームリーダーを務めることになったのですが、自分以外は全員が20代の若いメンバー。部下の新しい考え方や発想に刺激を受けつつ、チームリーダーである自分がどの段階でどう判断するかということを敏感に考えるようになりました。ベンチャー精神にあふれた若い人たちと一緒に新規プロジェクトに挑戦できたことは、逆に私のほうも成長させてもらった気がします。

役員に就任するとき、社長から言われたのは「個人プレーのできる人になってほしい」という言葉でした。性別は関係なく、キャリアの中で生まれてくるビジョンや理念を自分の言葉で語れるようになってほしいということだと受け止めて、率先垂範を心がけています。誰でもひとつは自分の強みを持っているはずです。それがあれば、どんなときでもぶれない自分の軸に戻って、いろいろなことが柔軟に考えられるようになります。いろいろな経験を積んで自分の強みを見つけてもらいたいですね。

多田 真規子氏
西日本旅客鉄道株式会社
執行役員

「女性だから言わなければいけないという思いが強くなった」

今の会社が民営化して3年目に、5万人の社員の中で十数名という数少ない女性として入社しました。しばらくは建築関係や不動産の仕事などに携わっていましたが、新規事業を検討するチームのメンバーに加わることになりました。日本にインターネットが導入され始めた頃だったので、ITという切り口で事業を検討したいと伝えたところ、ITを使った新規プロジェクトの立ち上げに携わることになりました。これまで「JRおでかけネット」をはじめ、新幹線等のネット予約サービス『e5489（いいごよやく）』、ICカード『SMART ICOCA』といった新しいサービスの開発・運用に取り組んできました。

30代半ばで管理職になったのですが、そのときは全く心の準備ができていませんでした。リーダーシップやコーチングの本は何冊も読みました。私が入社した頃の上司は男性で威厳のあるタイプだったのですが、自分はそういうタイプではないので、同じようにやっていてもしようがないと思いました。部下が何か失敗したり困ったことがあったときには、何がダメなのか、本人はどう思っているのかなどをじっくり話し合って聞くようにしています。

管理職のときは自分のチームのことを考えていましたが、役員になってからは会社全体を良くしたいという意識のほうが大きくなってきました。自分の仕事とは直接関わりのないことでも結果的によい成果につながればいいなと思っています。また、今まではどちらかというと、女だからそういう発言をしていると思われるのではないかと気にする部分があったのですが、役員になった今は、女性だから言わなければいけないなという思いがすごく強くなりました。「女性の視点が足りないのではないですか」ということも言っていく必要があると感じています。

まだまだ女性は活躍の場が少ないからこそ、今日もこうして女性が集まっていろいろな会社の方と知り合いになれる機会に恵まれて、たくさんの方に支えていただいたり、励まし合ったりできます。お互いに支え合える仲間ができるというメリットをとことん生かしてもらいたいと思います。

中島 伸子氏
井村屋グループ株式会社
専務取締役 兼
イムラ株式会社
代表取締役社長

「プラス1というのは自分自身の特徴ある一歩をつかむこと」

私は20歳のときに北陸トンネルの大事故に遭いました。一酸化炭素を吸った影響で2年間全く声が出ず、望んでいた教師の道も閉ざされ、何に進んでいいか迷いながら井村屋でアルバイトをしていました。あるとき、肉まん・あんまんの敷き紙に皮がくっついてはがしにくかったので、改善できないかという提案をしたところ、すぐにトップへ反映されて改善の報告をいただき、消費者に密着した食品産業に興味を持つようになり、社員登用試験を受けました。

正社員となって、営業に30年携わってきましたが、当時は全国営業が100人以上いるなかで女性は私1人でした。3人の子どもを育てながら北陸支店の支店長も務めました。49歳で営業40人以上を抱える関東支店の支店長となり、単身赴任も経験しました。年上の部下も多く、なかなか指示通りに動いてもらえず、悩んだ末、辞表を営業本部長のところに持っていきました。営業本部長の返答はとても厳しいものでした。「そんなことで悩む暇があったら、一軒でも得意先を訪問してお客様から評価をもらえ」。私の中に甘えがあったのだなと目が覚めた瞬間でした。それからは積極的にセールスに同行して、得意先からの評価も得られるようになりました。あの叱咤が東京での初めて自立した瞬間だった気がします。厳しいけれども尊敬できる「ボス」と言える人を企業人として得られたことは、とても幸せだと思っています。

管理職になってからは自分を通して会社が見られているという気持ちが強くなりました。役員になると、管理職の時代とは何十倍もスピードが違うし、判断力も必要で責任も大きくなります。それまでに多くの経験をしておくことは後々とても役に立つと実感しています。父から教わったことがあります。「人生は思い通りにいかないものである。しかし、どんな辛いことにも意味がある。『辛』という字は、そこに横棒を一本足せば、『幸』という字になる、そのプラス1というのは自分自身の特徴ある一歩をつかむこと」。私はその“プラス1”を大事にしています。皆さんも自分自身の“プラス1”をぜひ身につけてチャンスを引き寄せてください。